

北区「WA（わ）のこころ」創生講座 第4回「茶道について」

メインパーソナリティー：能楽師観世流シテ方 河村 晴久 氏

ゲスト出演者：茶道速水流八世家元 速水 宗燕 氏

字幕

<河村晴久氏>

皆さんこんばんは。今回も「北区「WAのこころ」創生講座－文化のWA－」をご受講いただきまして、ありがとうございます。

今日は茶道速水流八世家元の速水宗燕先生をお招きして、茶道の心について、お茶のことについてのお話を承りたいと思います。実は私自身はお茶の稽古をしておらず、本当にその世界に疎いんですけども、私がやっている「能」もそうですし、お茶もそうですし、4月にお越しいただいたお花（4月5日開催の華道家元池坊次期家元 池坊 専好様）もそうですし、中世という時代は本当に面白い、こういうふうな今に続くものが始まった時代なんですね。それがずっと継承されて、今の生活の中に生きているという、この始まりの時代の中世、そういう点では非常に茶道に興味がございます。

まずは、速水先生、自己紹介からお願いできますでしょうか。

<速水宗燕氏>

皆様こんばんは。

茶道速水流という流儀でございまして、八代目ということで、3年前に後を継ぎました、速水宗燕と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

速水流という流儀は、元々速水宗達^{そうたつ}といわれる方が、1700年時代の方なんですけれども、江戸中期に始められ、その後は、京都でずっと家元を構えてですね、京都の三千家さんと、藪内さんと、速水流という5流というものが、戦前まで唱えられていたようでもあるんですけれども。その中で8代ということで、荷が重い気持ちでいるわけでございます。

<河村晴久氏>

お住まいも北区におられるということで、しかも佛教大学のご卒業ということで、まさにここなんですね。

<速水宗燕氏>

まさしく、今日のご縁があったと思っております。

<河村晴久氏>

まずはお配りの資料にもございますけれども「茶道とは」ということで。日本の伝統文化の多くにはこの「道」がついてまいりますね。能は「能道」とは言わないです。ところが華道とか香道とか、武道もそうです。「道」がつきますね。日本の伝統文化におけるこの「道」というものについて、まずはそこからお話いただけますでしょうか。

<速水宗燕氏>

確かに、「能道」とは言わないんですよ。それは芸能の世界というか、何か違いがあるのでしょうか。

<河村晴久氏>

精神的なところは通じるものはあるんですけれども、なぜか「能道」とは言わないという。

<速水宗燕氏>

能もそうですし、本当に室町時代というのが一つのキーになるようなこともあると思いますので、今日はお茶の「道」について少しお話させていただけたらと思います。

お茶の「道」ということでございますけれども、お花の「道」であったり、お香の「道」であったり、いろいろな言葉に「道」という言葉がつきます。武道でいきましたら、剣道であったり、柔道であったり、いろいろなことで「道」という言葉がつく、日本独特の文化といいますか、考え方が「道」の世界であったりいたします。

その中の一つのお茶の「道」ということで、お茶の一服、私もお茶会等をいろいろする中で、お作法を通して、そのお作法をきっかけに、皆様一会に集まっておいただき、そこでご縁を感じながら楽しくお茶を飲む。そういうような世界というものが、本来のお茶の「道」の世界であったりいたしますが、今やイメージ的には、精神修養であったり、何か自分の心を磨くようなものであったり。あとは戦国時代から続いているような、色々な良い道具を自分の中で集めて、「私はこんないい道具を持っているんだぞ」と力を示すようなお茶会であったり。いろいろなことで、お茶というものは捉えられて、いろいろな流儀ができております。

その中で、私の速水流という流儀。流祖は、少し紹介してもらいましたけれども、1739年に生まれて1809年まで生きられた方です。江戸中期に速水宗達と言われる方が、裏千家八代目の一燈宗室^{いっとうそうしつ}を、その時代は京都もすごく文化が盛り上がっていて、お茶の世界もすごく盛り上がっていたのですが、その時代の一燈宗室を師匠として速水宗達は、お茶というものを学び、20歳の頃には、一人前と言いますか、一燈宗室の右腕の存在でした。

20歳以降はいろいろな武者修行をされて、いろいろなお茶の起源を研究されまして、流祖の30代、ちょうど一燈宗室師匠の最晩年の頃になるのですが、その頃には速水宗達と言われる方は、自分のいろいろな「お茶」というものを武者修行しながら確立していく。そういう風にして速水流というのができ上がるということでございます。

その中で、やっぱりお茶の「道」というのはどういうものなのか、ということを考えられまして、大体のお茶の起源というのは、千利休さんと言われる方が主要な方として称されておられますけれども。それ以前の室町時代、六代将軍の足利義教の時代に、このお茶の儀礼というのが生まれたんだ、というふうに速水宗達は仰っておられると。そういうふうな起源というものをすごく意識した方でもあります。その中で、「道」というのは何なのかということで、いろいろな速水宗達の考えに触れていくわけなんですけれども。

皆さんは今、「道」といえば、皆さんの生きる「道」。自分がどうやって生きていくかという、どちらかという主観の考えですね。そういう中で、自分自身がいろいろ学んで、そこにどう道が開けていくか、というような「道」の世界というものが、大体の感覚であったりするわけです。これ自体はどちらかという、昭和になってからの新しい考えであったりもしますし、いろいろな幼少期の教育によって培われてきたものであって、自分が死ぬまでに何ができるかというような考えです。お茶の世界もどちらかという、自分をどう磨いていくか、どう自分を表現していくかというようなところに変化していくわけなんですけれども。

実は、その「道」という言葉は、今言ったように目の前に写る「道」というようなものではなくて、昔に速水宗達も仰っていますが、足元にある道のことを「道」と言うわけなんです。要するに、目

に写る「道」というものは、自分の死というものが目の前にあり、それがどんどん迫ってくる。その間に自分が何をしようかという主観的な世界であって、私の言っているこのお茶の「道」、本来の日本の「道」の世界というのは、足元にある道であったりいたします。

要するに、足元の道というのはどういうものかといいますと、私が生まれる以前、日本が生まれて、神武天皇であったり、天照大神であったり、2000年間「日本」と言われる国のシステムがあるとするならば、地球が生まれて何億年と「道」というものはずっと連なって、これから、私たちが亡くなくても、さらに続いていく「道」というものがあるわけなんですね。その「道」というものを知るのが、本来の「道」の世界であったりいたします。

その中で、日本のいろいろな昔の物差し、人々がどういう営みをしてきたか、それを稽古というもので学んでいくわけですが。要するに、いろいろな形を学びながら、今はどういう物差しに変化していくかという、地球のいろんな変化ですね。

例えるならば、元々は、今は綺麗な建物が建っていますが、昔ここはジャングルだった。木が生い茂っていたわけですね。そこが段々とみんなのいろんな知恵によって、砂利道になっていって、段々コンクリートになっていって。どんどん人間というのは、住みやすいように足場をならしていくわけです。そういうふうにして、ジャングルの時代だったら、やはり自分の主観的には人間というのは生きていけない。それぞれが自然の脅威、恐れ、そういうものを感じながら生きるわけですから。そういう意味では、足元の自然のことは見つめる時間というものが、人々にあったわけなんですね。そういう時のルールがあるわけですね。そのルールがあって、だんだんと人間が住みやすくなってくると、今までは自然を、足元を怖がっていたのが、次は隣の人を怖がってくるんです。「こいつ何考えているんだろうな」とかね。そういうふうにして人を怖がる。そこに自分都合のルールをどんどん作っていくわけです。そういうふうにして、世の中というのはどんどん自分都合、主観的な考えに変化していくわけでございます。

そういうふうにして、このお茶の「道」という世界は、昔のいろんな物差しというものを学びながら、こういう感覚があったんだな、今はこういう時代に変化してきたのだなということを学びながら、この昔から続く「道」を感じることによって、さらに自分が死を迎えてからも、さらにその先の200年300年を想像できるような考え方、考える人々を共有する場というのが「道」の世界で、それをお茶の一杯というお作法を通して、その中で皆さんがそういう考えを共有できるものを求めていくというのが、「道」の世界ではないかと思うわけでございます。

<河村晴久氏>

どこまでも続く道というそのお考え、とても面白くお聞かせいただきました。

以前の、「能へのいざない」の講座でも話したことがあるんですけども、世阿弥の孫世代の足利義教の少し後の時代に、観世小次郎信光^{かんぜこじろうのぶみつ}という人が、「遊行柳^{ゆぎょうやなぎ}」という曲を書いているんですね。「道の辺に清水流るる柳陰 しばしとてこそ立ちどまりつれ」という歌があるんですけども。遊行上人が、道を通して東北の方へずっと、法（のり）の教えを伝えに行く。いろんな人が道を通っていく。今回通ろうと思い、夕暮れ時に太い道を行こうとすると、おじいさんが「こっちこっち」と言って古い細い道を教えるんですね。その道を行くとそこに朽木の柳がある。実はこれが、先代の遊行上人が通った道なのだと。実はおじいさんはこの柳の精であって、法の^{のり}の教えに出逢いたいので、遊行上人をそっちの道へ案内するんですね。柳の精は仏縁を得て喜んで舞を舞うんですけども、この柳の命はもう

ぽきっと折れて終わるんです。けれども、その道は続いているんですよ。また次の遊行上人もその道が続く。後の時代の芭蕉もその道を行くんですよ。だから、現実世界の命は終わる、けれども今仰ったように、過去から未来へ道は続く、というような考えが、まさに足利義教のちょっと後の時代の能役者が作っているんですよ。そういう時代性もあるのかと思うのですけれど。結局、目の前のここだけでない、もっと長いものを見るという心が、中世の時代に、皆共通に芽生えてきたのかなあというふうなことを考えながら、今お話を伺いました。やっぱり時間の単位とか、そういうものが大事になるんですね。

<速水宗燕氏>

そうですね。時間の単位というのはお茶の世界でもすごく大切です。

最近私も、中秋の名月のときに、東京の出張の帰りで、夜中12時ぐらいになって、翌日も朝の6時ぐらいから予定があったのですが。庭が、電気がない所だったので、月の明かりがぱあっと明るくてですね。ああ綺麗だなあと思って、こう見上げて、月を望んでいまして。あつという間に1時間が経ってしまい、もう1時で全然寝れないなと思いながら見ていたのですけれども。そのときも、やっぱり月というのは普遍的な光で、本当に昔の人も眺めていただろうし。それを一緒に眺める気持ちと言いますか、時間軸で同じものになると思いますか。普遍的なものを感じました。

そこですごく感じたのが、宇宙っていうものですね。昔の人は木星であったり、お月さんであったり、いろいろな動きというものを意識しながら、いつも夜になるとそういうものを見上げて、おそろくいろいろなことをお願いされたりいろんな思いを馳せておられたと思うんですけれども。そういう中で、今は宇宙旅行とかでどんどん宇宙に近づいているような感じもするんですけれども、何か、本来の宇宙からどんどん離れていっているような気がいたします。昔の人は、地球も宇宙であり、流祖も言うようにお茶も宇宙の一物であり、我々も宇宙の一物である、というような考えであったものが、どんどん人間が主観的になってきて、自分の体も自分のものであり、地球も自分のものであり、地球と宇宙というものが分離してしまって、だから宇宙旅行という言葉ができてしまったり。昔の人は、宇宙そのものが我々であり、我々そのものが宇宙でありという、宇宙という本質を知っているんじゃないかなと。そういう意味で、宇宙には昔の人の方が近かったし、いろんな本質というものを知るといえるか、感じていたのかなあというのは思いますね。

<河村晴久氏>

今より見えるものが多く、感じる力も強かったのでしょうか。

<速水宗燕氏>

そうですね。

要するに、今は電気がありますから、星も見えにくくなっていますが、昔は電気というのは無いわけですから。月の光であったり星の光であったり、そういうものが本当に見えて、感じるものがあったのではないかなあ。

<河村晴久氏>

「足元を見る」という言い方でしたけれども、結局「そこ」というゴールがあるものではなくて。もっと、しっかりと足の下を見る、カタカナを使ったら「アイデンティティ」に繋がるような世界かと思うんですけれども。そのような「道」というものの中で、お茶というものができてくる。

そうすると、やっぱりこの流儀としてのいろんな考え方、次のお話に移っていこうかと思うんです

けれども、速水流と仰るこの流儀の特色といたしますか、普通、「和敬静寂^{わけいせいじやく}」という言葉はよく聞くん
ですけれども、これが「敬和静寂」。そこが特色なんですね。

<速水宗燕氏>

そうなんですね。

速水流というのは、江戸中期にできた流儀です。千家と言われる流儀がありながらも、速水家とい
うお茶が生まれる。その理由として、一番の違いと言いますか、速水流の特色というのが、この「敬
和静寂」という言葉であつたりいたします。

もともと、先ほどご説明いただいたように「和敬静寂」という言葉で、この言葉は昔からの、千利
休の時代からあるものです。これは「和らぎ敬いて清く静かに物好きをせよ」という言葉が本来あり
ます。その中で、和らぎ敬う「和敬」という言葉に、流祖はちょっと異論を唱えて「敬和」と、こう
いうふう言葉に差し替えられたということです。まず、敬うことが本質なんですと。まず相手を敬
いなさいということですね。そこに和というものがあるんですと。

和らぎ敬うこの「和敬」の世界というものについて、和らぐというのは、自分の精神修養から始ま
るわけです。和らぐところに敬いがあるというものは、自分をどうするかがまずあって、そこに敬い
があるのだという考え方ですが、そうではなくて、まず何よりも、自分じゃなくて他力の世界なんで
すね。敬うところに和があるんだ。これは流祖がそういうふう唱えているわけですが。これはもと
もとは日本の古神道と言いますか、そういう時代の考えであつたりいたします。要するに、仏教はど
ちらかという大陸の方から渡ってくるものであって、もともと日本というものは神道という、八百
万の神々がいて、というような世界感から、日本というものはそこに礎があり、そこに仏教が入って
くるわけなんですから。

日本というのは、私が言ったように、ジャングルというところから、だんだんと砂利道になってコ
ンクリートになっていく。分かりやすく言っていますけれども。そのジャングルの時代というのは、
人々は主観的には考えられない、やっぱり死というものに怖れがありますから。ジャングルのいろん
な自然の脅威によって、それぞれが亡くなっていったりするわけですから。そういうところで、
神のお怒りとかいろいろなことで、いろんな社会のルールを作るわけです。そういうルールが神道
の中で、日本にずっと残っているわけです。

大陸の方も、最初はもともとジャングルなわけですから、それが段々砂利道になって、コンク
リートになっていくわけです。その中で大陸の場合は、民族がお互い攻め合って、どんどんリニュー
アルされていくんです。だから、ジャングルの時にできたルールが、違う民族によって無くなりまし
た、無くなった時はもう砂利道ぐらいでした、砂利道ぐらいだと、どんどん自分の都合のいいルール
が生まれてくるわけですね。段々コンクリートになれば、もう足元を見なくても自分の都合のいいよ
うなルールになってくる、というふうにして、大陸の方ではどんどん人を治めるルールが主観的にな
っていく。

けれども日本というのは、実は海が結界になっているんですね。だから敵が今まであまり入ってこ
られなかった。だからこそ、どんどん温められた日本の文化、「道」の世界というものがあつたりいた
します。いわば、西戎東夷^{せいじゅうとうい}という言葉です。中国では、東の敵西の敵というような言葉があります。

<河村晴久氏>

東夷西戎南蛮北狄^{とういせいじゅうなんばんほくてき}の。

<速水宗燕氏>

そうですね。日本では、西戎東夷の戎と夷というのは「えびす」という言葉で。日本は、隣の国がえびすさんで、いわば福の神なんですね。だからいろんな宝物を持って海からやってきてくれる、という考えであったりいたします。だから日本はすごく独特で、昔から日本というのはすごい国だと海外からも称賛されているというのはそういうところであったりするわけです。

そういう中で、「敬和」という精神は、本当の日本の根底になる部分で、「和敬」というのはどちらかという大陸の考え方です。和らぐというのは、まず自分の見え方を変えていきましょう。自分の目の前に写る物事、その見え方を変えていきましょうというのは、これは周りに敵がいるからです。日本というのは、周りに敵がいらないからまず敬えるんです。そこが結局、日本のこのお茶の世界という、もともと日本の儀礼の世界から生まれたもので、本当の敬和の精神から生まれたんだということを流祖は唱えて、速水流というものを作られた。要するに、他のお茶の流儀は、茶禅一味の世界と言いますか、禅宗の考えであったりとか、そういうものも一つ大切にされている中で、速水流の流儀というのは、そういう禅宗もお茶であるし、いろいろな考えはあるけれども、お茶はお茶の世界であって、何に偏るものでもない。何よりも自然というものを敬い、その足元を見つめるものが「道」であって、というようなことからこの「敬和」という言葉が、にじみ出ているのではないかと考えております。

そこに、この静寂という言葉が続くんですけども、この清らかというのは川の流れて例えてもらったらすごく分かりやすいです。川の上流というのは清らかという表現を使うんですが、川の下流では清らかという表現は使わないですね。要するに、物事の起源に近い部分が清らかだということです。どんどん川の下流に行くと清らかではなくなって、どんどん人の作為的なものが混じったり、川でも、元々は上流では浅く透き通っていた水が、どんどん濁っていくイメージがあたりいたします。

我々も人生、赤ちゃんの時が一番清らかなんですね。どんどん人間はいろいろな風に当たって汚れていくと言いますか、濁っていくわけなんですけれども。その中でも流祖は、「敬和」の精神の中で、清らかな空間にずっと居続けたら汚れることもないのだからという、この「清に居なさい」というのが、この言葉であって、「清に居る」ということはどういうことかと言ったら、いろいろな物事の起源、本質を求めていきましょうということです。その本質、生まれた起源を求めることによって、物事の清らかなものを得ていく。川というのもどんどん下流になれば、川底もどんどん深くなっていて、底が見えなく澱んでくるわけです。ちなみに、今のお茶の世界もそういうものになってしまっている、これは自然の流れなんです。川底が分からないから、ちょっと敷居が高く感じたり、それは本質的な話であたりいたします。それを、この速水宗達と言われる方は、もっと川の清らかなところを求めて、川の底が澱んでいるものも、どんどん浄化していきましょうという考えが、この速水宗達の「清」に込められた言葉であります。

やっぱり、どちらかという、川底が澱んでくると、何を求めていくかという水面の綺麗さを皆求めてくるんです。もう川底は分かりにくいから、水面の綺麗なを見せていたら、皆は目で見た通り、綺麗であるとか、かっこいいとかを思う。そういうところで、要するに人が寄ってくるわけです。そういうふうにして組織を作ったりするということも、お茶の世界にもあたりするのではないかと思いますけれども。この速水家として、しっかりと浄化する、本質を求めていく、そういう志を求める人に集まってもらうということが、やっぱり清の空間じゃないかと。

僕も、小さい子を今よく教えてるんですけど、もう大変です、荒々しいというか。お茶の世界ですから、しっかり決まった作法があって、その型から外れてはいけないというようなもので。大人の方を教えるのは、皆さんそれを心得ておられますから、なかなかそういうことはないですけど、子どもはもう、型にはめようと思ってもなかなかできません。けれども、教えている中で、これが清らかというものなんだろうと、教えながらもすごく学ぶといいますか、その心は大事にしていきたいというのは、すごく感じているんです。

<河村晴久氏>

世阿弥の風姿花伝ねんらいけいこじょうじょうの年来稽古条々では、子どもの時はそのまま「ふと為し出だす」ところがいいと。だから、その型のきちっとあるものを教えるのだけれども、割りに好きにやらせておいて、そのうちに自ずから分かってくるようになるだろうと、そういう感じなんです。

<速水宗燕氏>

そうですね。何よりもやっぱり、お菓子おいしいとか。

<河村晴久氏>

まず好きになることですね。

<速水宗燕氏>

楽しんでもらうことがやっぱり一番の感覚で。そういうところでこの「清」という、我々のお茶室の空間であったり、そういうものが「清」という空間で、その本質とは何かというところを求めるためには、「寂」という気持ちです。心静かな、波の打たない、要するにリラックスしているような。

今のお茶の世界は非日常に入っていくので、皆さんなんだか緊張して、心に波がある方が非常に多いんです。そうすると、結局言っていることが、「そうなんですね。」「はい、わかりました。」「はい、そうですね。」というかしこまった風になってしまって。もっと日常にお茶というものもあるべきだと僕は思っておりまして、日常にあって、ふと言われたことに疑問を持つとか、そういうようなものが本当の「寂」。静かな、目の前の形を静かに見つめられる。そこに大切なところがあって、そういうものを求めるところに、自分の志を養うものというのが、この「寂」の気持ちであって、そういうものを求めて「清」の空間に居なさい、そういうところがお茶室だというのが、速水流の考えなんです。

<河村晴久氏>

次の漢字は、これは普通は読めない漢字ですね。

<速水宗燕氏>

次がこれですね。てきげん滌源です。右から滌源と読みます。

一条家と言って、藤原五摂家の、その当時の一条の当主の方で忠良公ただよしと言います。1800年前後の方です。この方が、速水宗達のお茶室というものができ上がったときに、小座敷という三畳台目の席に上段之間があるんですけども、そういうお茶室ができたときに、この「滌源」という言葉をいただいて、これを「屋号にきなさい」ということで、いただいた言葉でございます。

これは言葉として、一条忠良公も速水のお茶にすごく興味をお持ちになられたということもあるんですけども。「滌」というのが浄化するという意味で、源を浄化する、ということで川の上流ですね、いろんな物事の本質を求めるといような姿が、速水宗達に見受けられるわけです。その中でこの「滌源」という言葉を、お茶室の居宅落成のお祝いにいただいたということでございます。

何よりも、この清らかというものが一つのキーポイントと言いますか、清らか、その源、形のいろんな本質の起源というものがあって、時代としてどんどん川の下流に向かっていくわけになりますから、どんどん形骸化していくものを食い止めるためにも、本質というのは求めていかなければならないという事だと思います。

<河村晴久氏>

大きな言葉なんですね、この「滌源」というのは。

<速水宗燕氏>

せっかくですので、あとは速水流の流祖がどんなことをしたかということで、次の説明をしていきたいと思います。

瓢箪というのは、いろんな物事の「道」の形を表すもので、皆さんもいろいろ物事をやる時に、瓢箪みたいな形だと思うんです。それは何かというと、入口は狭いんです。慣れるまでにはいろいろと教えてもらう期間があって、それは瓢箪の入口でいうと、ちょっと明るくて「こちらにどうぞ入ってください」というようにいろいろ先生が教えて、瓢箪の入口に入っていくわけです。すると、少しずつ慣れてきた、というのが瓢箪の最初の入口のこの膨らみの部分です。それから、次へいろいろやっていったら、どんどん暗くなっていくわけです、瓢箪の入口から離れていくと。そうしたら中潜りの部分が狭くなって、これはスランプの部分です。スランプで、真っ暗だと言いながら、自分でいろいろ考えながら出たり入ったり、暗いからどっちがどっちか分からないようになって、右往左往しているわけです。最終的には、「この瓢箪の中身を知ってください」ということが、この歌に書いてあります。「入口に勝る難所の中潜り 通りて後の味をこそ知れ」という言葉です。「通りて後の味をこそ知れ」ということで、いろんな物事の中で、瓢箪の隅々まで知って、いろいろな味というものを知って、形を知ってくださいと。それこそ、これは流祖の言葉なんですけども、流祖からすると、裏千家の一燈宗室から学んだこの瓢箪の形だったと思うんです。それをもう 20 歳の頃に、この瓢箪のようにいろんなことを教えてもらいながら学んでいくわけでございます。

流祖はそれに飽き足らず、さらに追求していくわけです。瓢箪が破れている絵を書いて、「もう破りなさい」と、最終的には。この形を破ると言いますか、それが「得ずや誰」。誰がこんな瓢箪欲しいかと。「嗚呼優曇華や」。ああ不吉だなと。優曇華の花が咲くといって、なかなか咲かない白い花なんですけど、それが咲いたら不吉なことが起こるという優曇華の花です。「唯々微笑」。ただただ微笑んでいる、ということを言っています。要するに、しっかり破ってですね、明るい無限の世界に行きましよう。入口を出て無限の世界に行くのではなく、殻を破ってということです。結局、瓢箪の中で、ずっと暗闇の中で蠢いているのではなく、また明るいところで、殻を突き破って、本質というものを求めていきましようというような、流祖の志であったりするのではないかと。

<河村晴久氏>

守破離とも少し似た。

<速水宗燕氏>

そうですね。そのようなことでございます。

あとはもう一つ、流儀の特徴をお話ししておきたいのですが、「不偏不易」という、偏らず、変わらずという。「易」という字が変わらないという意味で、変わらずということで。どういうことかという、茶禅一味の世界というものに偏らないということです。

お茶というものについて、元々は、孔子を始祖とする儒教を基にした、世を治める礼楽の世界というものが漢の時代にあるんですけれども、漢の時代には、礼楽の世界で世が治まり、そしてまた、その礼楽の世界で世が治まったのは、中国の唐の時代なんです。唐の時代といたらちょうど日本が遣唐使であるとか、平安時代といわれる時です。いろんな交流があって、その時代に、礼楽の世界、訓詁学と言われる学問なんです、そういう中で、中国というのは統治があったと。その中で、安定しているんな外交というものが、唐はできたんだと。そのような時代があり、その時に、日本というのは古事記というものが編纂されたりする時代になっているんです。

あの時代に、いろいろな日本のシステムが生まれていく中で、この礼と楽という双曲の、プラスマイナスの世界と言いますか、そういうような畏敬の世界、畏れの世界ですね。結局、自然に畏れるというその世界です。畏れるところに形が生まれる、という世界です。そういう世界感を作る。要するに、天皇と言われる存在というのが畏れの世界というふうなところから、世の中を統治していこうという世界であって、それが結局、この平安時代になって公家の世界、鎌倉時代になったら武家の世界になっていくわけです。そういう公武の双曲の世界に変化していくわけです。

武家の世界になった時にも、世の中を、日本を統治しようということで、栄西禅師と言われるお坊さんが中国に渡って、お茶を持ってこられる。これは実はなぜ持って帰ってきたかというのと、一つの説ですけども、畏敬の世界を表現するために、改めて武家の世界でも畏敬の世界があるんだということ表現するために、中国からお茶を持ってきた。要するに、中国では唐の次の時代は宋なんですけれども、宋と日本の関係というのは、日本からすると畏れの、大陸というのは畏れの世界として利用していたわけなんです。だから、平安時代でも遣唐使と言われるもので唐に人を派遣して、いろいろな織物であったり、いろいろなお茶の器もそうですし、いろんなものを日本に持ってきて、それを神様に供える。そうすることで、神への畏れの世界を表現していた、というふうな。そういう中で統治するルールを作り上げていた。そういう畏敬の力を借りていたのが中国との関係であったと。それを公家の世界がやっていた中で、武家の世界になった時にも、畏敬の世界をまた持つてこようということで、改めてお茶、そして茶入であったり、天目茶碗というものを持ってきて、そういう中で、お茶というものの畏敬の世界で、ルール作りをしようというふうなところから、唐物茶入と和物茶入という、この真逆の焼き物を焼いている世界感が生まれてくる。これはもう別世界であるということを表しているんです。

鎌倉時代は世の中が安定しなかった時代でありまして、その後室町時代になって、足利義満の時には日明貿易を行います、あの時代には武家がすごく盛り上がって、公家の世界がもう点の世界になってしまった。というところで、足利義満が武門の礼という礼法、小笠原礼法というんですか、そういう礼法というものを武士の中で、礼というルールを作ってしまうということで、作り上げられていくわけです。結局、公武ですね、武家と公家の世界というのは、双曲の世界になっています。武というのは、徳川家でもそうですが、武力で世の中を治めるんですけど、一方で武家というのは力ですと喧嘩をしたくないわけですから、どんどん文化が発展してくるんです。文化が発展してくると、公家の世界が大きくなっていく、というふうにして、公家の世界が大きくなったら武家がどんどん小さくなっていくというふうにして、そちらも双曲といいますか。春夏秋冬があって、夏はプラス極、冬はマイナス極とすると、冬はプラス極が小さくマイナス極が大きくなって、夏はプラス極が大きくマイナス極が小さくなったという、結局、本当に双曲の世界というものがあっているわけです。

足利義満の時代は武の世界がすごく発展していて、武力がまだ効いてたんですけれども、どんどんまた文化が発展するわけです。日本というのは、文化が発展すると公家の世界が力を持つ時代になるということで、後に足利義教がお茶の礼を、後花園天皇も巻き込んで確立したというところから、このお茶の礼というのが日本の礼になったのだと、礼楽の世界の法を流祖が説いております。そういうところからお茶の起源と言いますか、公武の互いの畏敬の世界、お互い畏れている中の形から起源があり、だんだんと形が崩れていくようにして千利休の時代に崩れていったんだと。千利休の時代には禅が盛んで、千利休自身も参禅されていますが、畏敬の世界というのは目で畏れる世界ですから、結局、だんだん目で畏れたくないと言いますか、人間はやっぱり目を瞑りたくなってくるんです。それが千利休の時代で、千利休は、目の前の畏れの形に対し、もう目を閉じてしましましょうと。半眼ぐらいで見てしまった方が、お茶の香りとか、お茶のぬくもりとか、そういういろいろ感じるものが出てくるでしょうと。目でぎらぎらと畏れている時というのは、目で畏れているだけで、いろんなものはあまり感じないんです。それが形の起源なんですけれども、そればかりやってもお茶というのは楽しくないので、やっぱりお茶というものを手近にするためには、どんどんそうやって、目に入る畏れを除いていきましましょうと。そういうふうなところから千利休は、目を半分閉じてお茶をやりましましょうと。

要するに、それが暗い部屋で、楽茶碗でお茶を飲む。だからお作法というものはあまり目に入れない。一服のぬくもりであったり、ひと時のありがたみを感じましようというような世界感というものが、千利休の時代に大成された。その大成の中で、当時の武将も、やっぱりそういう形というものの、深いものよりは、明日死ぬかもしれないような人生の中で、何か形であだこうだ考えるのではなくて、ひと時を気持ちよく味わえるお茶というものが広がっていくというのは、その時代ならではののを感じます。それで、その千利休のお茶というものが基本となり、それが千家という流れになっていったのではないかと。

流祖がその千家のお茶を学ぶ中で、茶禅一味でないところにゴールがあるのではないかと。何か禅に偏るものでもないけれど、というのがこの「不変不易」の言葉であって、茶の湯というのは、「何伝うべき言の葉も為さざるにこそ道はありけれ」ということで。茶の湯というのは、何伝う言葉というよりも、自分が楽しむというところに「道」があるんだと。だから、いろんな形、ルールというものがある中でも、結局楽しむことが、その偏りが無くなるところであったりするのではないかと。

あとは、この「不易」。「茶の湯には何象^{なにかたど}らん武蔵野のくまなき月に心ならずや」ということで。茶の湯というのは、「何象らない武蔵野」、武蔵野というのは武蔵野平野です。本当にだだっ広い、無限の平野というようなものを表現されているんだと思いますけど、そこに隈なき、薄ぼんやりと輝く月に心がなったらいいなあ、というようなことで。そういうことを思っ、て、いろいろ師匠の一燈宗室から伝わる言葉というの、斜めから見たり、真正面で受けて、本当にいろいろな角度で見ながら、偏りというものを考えながら、いろいろお茶の道を考えられて。最終的には、私が言ったように月を見て、中秋の名月のような隈なき月をみて、昔の人も今の人も、この月を眺めてたんだという、そういう普遍的な、不変不易的な心というものを、やっぱり流祖も求められていたのではないかという気持ちもあって、私自身も月を眺めていたわけでございます。

そういったものが速水流の一つの歴史と言いますか、速水宗達自身が、茶博士という方として、その当時はおられたらしいです。一燈宗室も、表千家からの養子ということもあって、元々後を継ぐ者

ではなかった。そこに急遽、継ぐことになったようでして、そういうことでも、一燈宗室は流祖をとでも気に入りまして、流祖は一燈宗室にいろいろ意見をしたと思うんですけど、それを何か喜ばしいと思っていたのだと思います。

<河村晴久氏>

そういったお茶の心をお聞きしましたが、今度は、心を未来へつなぐというところで、お話をいただけますでしょうか。

<速水宗燕氏>

お茶の心を未来へということで、私自身もこのコロナ禍で、いろいろなことを考えるといえますか、今までのやり方では駄目なような気がしますし。

<河村晴久氏>

まず、今のお茶の集まりというものはどんな状態ですか。

<速水宗燕氏>

やっぱり皆さん、集まりたいわけですね。私もお稽古とかをオンラインで試みてはいて。一応、形を学ぶだけ、何もお稽古でできなかった状態の時ですけども。やっぱり何かきっかけがないといけない、ということで、一応お稽古というものを形だけでも。時間を作ってもらおうというのが一番かと思って、オンラインでお稽古をしていたんですけども。ようやく今、ちょっとずつ、皆集まりたい気持ちもあって、八畳に大体 10 人は入れるぐらいのお茶会というのは少しずつ復活しています。ですけど、まだマスクをしてやっています。それ自身もこれからどんどん、また通常になっていったらいいなと思います。お濃茶の回し飲みも、これから課題になっていきそうだなと思ったりはしていますけれども、何よりも、ああこうだとガシッと決めるというよりは、その時に皆さんが喜んでもらうことをするのが、大切なのかとも思いますし、何よりも、いろんな歴史をしっかりと守りながら、今はこういう時代になったんだという気持ちで、向き合っていけたらいいなと、このコロナ禍の中でいろいろそういうのを考えております。

これから、私自身この家に生まれて、伝統文化というものを継承して守っていくという運命と言えますか、そういう中で、どうしていこうかと考えております。しかも私はコロナの前に、うちの父から八代目というものを譲りいただいてということで。何よりも私たちはお茶を点てて、皆が喜んでもらうということをまず一番だと思っているんですけども。何よりも、お茶の心をどういうふうに伝えていくか。何よりも点茶というものが、お茶をたてることを「点」という字を書きまして点茶といいますが、その「点」という意味がすごく大事なのではないかと思っています。それが何かと言ったら、茶の心、心から形に変わる瞬間というのが、この形の起源というのが「点」の世界なんです。点というもののから形が生まれていくということで、実はこの点茶の「点」というのは、その「点」なんです。要するに、お茶が生まれる、それがこの点茶という「点」であったりいたします。

一番心に近い形の起源というものが、何回も言っているように、「清らか」という世界ですね。この「清らか」という世界を、皆さんと共有していくといえますか、そういうようなものであったりするのではないかと思います。また、我々がやっている儀礼も、実は「点」の世界を表現していて、ちょっと難しい話なんです。私たちは最初お点前をする時、^{なつめ}棗というお茶を入れる容器を^{ふくき}帛紗というもので拭きます。あれは実は、儀礼の世界で「玉帛」の世界なんです。孔子と言われる方が、「礼」という世界は「玉と帛紗の世界」であり、「楽」というのが、「太鼓と鐘、^{こしやう}鼓鐘の世界」である」という

ようなことを仰っていて、それが実は、お作法にすごく入っています。この「礼」の世界というのが、棗を帛紗で拭くという。棗は実は「玉」なんです。「玉」というのは、まん丸の玉といいますか、要するに、「点」の世界が、点から丸になっていく。点をうつと、点を中心にまん丸の丸ができる、というものです。そのまん丸の玉が形となり、その形をみんなが触っていく中でどんどん玉が歪んでいくわけです。最後には、自分の主観的に物事を捉えてしまう、玉を歪めていくような世の中になっていく。それを、帛紗で磨く、真玉にしていきたいと思います。それは何かと言ったら、棗を拭くことによって、「点」の世界を求めていきたいと思いますという、見える形で、「礼」の世界における「点」の世界を表現しています。

次に、茶筌^{ちやせん}とおしという作法で“こつん”という音を鳴らします。あれが結局、「点」の音の世界なんです。「点」とするんだけど音はすぐ消えます。このような礼楽の世界を通して、お茶の点茶というものが、儀礼として元々あったんだと。その点茶の「点」というのは結局何かと言ったら、元々はお茶を入れてからお湯を入れるのではなく、お湯を張ってその上にお茶の粉をぽんと降る。これが本来の点茶の「点」だったらしいです。結局、味とか香りというものを求めると、やっぱりお茶の粉を入れてからお湯を入れた方がおいしいということで、今やお茶の粉を入れてお湯を入れるという形になっているんですが、元々のこの点茶の「点」の意味というのは、お湯にお茶の粉を降るという、そこが「点」の世界だった。そういう中で、その「点」の世界の起源、清らかなものを口にするというような世界がお茶の世界なので、そういうものを意識して、清らかな空間というものを共有する同志といえますか、そういうものを、これから求めていけたらと思ったりいたします。

流祖が考える、お茶の空間の中で「清らか」というのはどういうものなのかといいますと、「恭しく」ですね。この恭しいというのは、神様に何か物をお供えしているという感じなんです。「恭」という字のイメージは、神様の神棚が頭上にあって、(お供え物を持った手を神棚に上げていて、)ここ(手よりも下)に心があるという言葉です。そして「安らか」に「おもむろに」というのがその清の空間である、というふうに流祖が仰っておられたりします。

お茶の御点前の極意を流祖が唱えています。茶の手前は「里^うの魚の」、里の魚というのは鯉のことです。「ゆたけく遊ぶ」、豊に遊んでいる。「おもむきに似たるはいとどめでたかるべし」、似ていることはとてもめでたいのです、というふうに仰っておられます。そういうふうにして、里の魚の、鯉が豊かに遊んでいるようなお手前というのが、お手前の極意なんですと。これはどういうことかという、鯉というのは、無意識に動いていると言いますか、作為的なものというのはあまり無かったりする。自然にいろいろなものが流れていくんだ、というようなことです。要するに、御点前自身もいろいろな流儀があって、それぞれにいろんな特徴を持っており、川の支流のようにいっぱい増えていくわけですけど、流祖は何よりも「自然」というものを一つの形のテーマとして、速水流というのは、いろんなことを清らかな部分に持っていくんだ、形の起源に持っていくんだというふうにして、作為のないような世界というものを、形として表してやらないといけないということを言っているのが、このお作法の極意なのではないかということであったりいたします。そんなことで、いろいろ固い話になりつつあるので、自分でも良くないなと思いながら、反省すべきなのですが。

<河村晴久氏>

一番大切なのは「自然であれ」ということですね。

<速水宗燕氏>

そうですね。まとめると、何よりも「自然に」と。最初に私が言ったように、『茶則』という速水流のお茶の規則の本があって、こうお茶はあるべきだという本があるんですけど。これはその一部と書いていますが、冒頭部分、一番最初のところなんですけれども、そこで流祖は、「茶の湯は宴安佚楽えんあんいつらくに似ているけれども其の式為す也」と。何よりも宴で安らかに気ままに楽しいものがお茶なんですよと。まずはそこなんです。何よりも楽しいことがまず一番です。けれども、そこには人と接するということがあり、人間考えるということが生きることであって、それを諦めてしまったら駄目なので、しっかり考え尽くして、たまには遊んで、楽しむということも大切であるし、そういう中で、人と接すること、これが「人事交接之禮じんじこうせつのかれい」というものであると。この禮（礼）というものを、しっかり知らないで駄目でしょうということで、速水宗達むすみむねたけは速水流というものを考えて、ちょっと複雑な話にはなりましたが、何よりも楽しいところから、礼というものを学んでいく。子どもに対しても、まずはお菓子とかでお茶の世界に触れてもらって、だんだんと馴染んでいくようにと思いながら、ということですね。そういうふうな「礼楽」の世界。これこそ本当に「礼楽」の世界ですね。

茶禅一味の世界というよりは、まず『茶則』の冒頭に「お茶というのは礼楽である」というふうに記載されていて、何よりも「礼」というのは、形をきちっと決めるもの、こうでないといけないというものになってしまいがちになります。だからこそ「楽」という何か形の無いもので、お互いの心が感化される。音楽を聴くことによって楽しむなど、お互い心を感化させるバランスを取りましようというのが、「礼楽」の世界であったりするのではないかと。お作法の褄を拭いたり、茶筌を打ったりということが「礼楽」の世界であり、点茶の世界であるというのが、速水宗達むすみむねたけの一つの研究の成果であったりいたします。

足元を見つめる「道」の世界というのは、いろいろ起源のことをお話ししましたが、「じゃあ今日から一人ずつ足元を見つめよう」という世界ではないんです。やっぱりみんな前を向いて生きているわけですから。皆さんは一人ずつでも前を向いて歩けるんです。前を向いて歩いて、その中でいろいろできるようになるわけなんですけれども、一人ずつ足元を見てくださいと言ったら、置いていかれる感じがしますよね。誰かが前を向いて歩いているなら僕も前を向いて歩いてみたいという感じになってきて、一人でなかなか足元は見つめられない。その中でお茶という、集まる場があって、志を求め合う場があったり、「道」の世界というのはそういう場所であって、だからお茶の世界が選択肢にはなっていないんです。何よりも、足元を見つめる世界で、1ヶ月に1時間でもいいから静寂の時間をとって、足元をみんなで共有できる時間として、お茶という世界であったり、お茶だけではなくて他の「道」の世界であったり、伝統文化の本質を求めながら、いろんな時代の物差しを感じる。それこそがこの「道」というものを感じることであり、それが、100年200年先のことも想像できる民族になっていくことに繋がる。今はどんどん主観的に目の前のものを追っているからこそ、自分の死というもので、終わってしまうものがあって、残すものというのは何だろうというふうに、なかなか見えづらい時代になってきているんです。ですので、もっとお茶であるとか、いろんな「道」の世界が、足元を共有しないといけない世界だということを唱えていくというのは、これからの「茶の心を未来へ」というところの一つのテーマなのかなと、僕はすごく思っております。

流祖も、速水家のお茶の十徳ということで、何よりも自分に、いろんな座右というのを備えましょうということを仰っています。ちなみに、十徳というのはお茶を飲むと10個の効能や徳が得れるということなんですけど、実は、流祖の十徳は順番になっています。

まず1番目。まず静寂の中でお茶を飲むことによって、常に自分への戒めの言葉が備わってくるといことです。2番目には、「熟得清潔^{じゆくとくせいけつ}」ということで、清らかで潔いものがよく会得できる人間になりますといことです。「清らか」という言葉が入っていますが、そういう人物は、神様や仏様にお茶をお供えできるようになります。要するに、そういう畏敬の、神に対するいろんな信心とか、そういう目に見えないものを見つめられる世界です。そういう世界は「進献尊長^{しんけんそんちやう}」、目上の人にもお茶を献ずることができますと。そこから次に「孝養父母^{こやうふぼ}」ということで、お父さんお母さんに対する親孝行に繋がり、そこに自分の気持ちというのは安定してきますとい「保変心気^{ほへんしんき}」。「変」は変化の「変」ですが、心気が変わることなく保たれる、穏やかになっていくといことです。そういう仲間たちが集まるのが「燕楽朋友^{えんがくほうゆう}」。「燕」というのは私、宗燕の「燕」、ツバメの「燕」なんですけれども。「燕居」というのは礼儀正しい空間とい一つの意味があるのですが、そういう「燕」と楽しむ中で友達、仲間が生まれますと。その仲間は、恭しく敬い久しく交わりますと、このように順番になっています。

九徳は「無間天魔^{むげんでんま}」ということで、念仏無間、禅天魔という言葉がありまして、念仏宗や禅宗といものが、言葉はあまり良くないのですが、その時代（鎌倉時代）は政治に偏っていたと、日蓮上人が言っているんです。周りの、外の声に偏りながら、宗教の教えが依存していくといようなことを、日蓮上人が批判したと言ったらいのか、批判ではないかもしれませんが、そういう状況を無間天魔、念仏無間、禅天魔であると言っています。要するにこれは、速水宗達も日蓮宗の方なんですけれども、外のいろんな雑音がありますよね、いろんな誘惑であったり。そういうものも仲間たちといたら入ってこなくなりますといようなことです。そこに「除疾延壽^{じよしつえんじゆ}」ということで、悩みが除かれ、寿が伸びますと。このようにして、速水流の十徳として速水宗達が書かれたものがあります。

日本とい国の風土として、周りの海が言わば結界としてありますから、何も入ってこない中でどんどん温められた日本文化がありますが、私自身は、日本の文化だけで終わって欲しくはないんです。昔は、大陸もジャングルだったわけです。だから、絶対に元々は自然信仰から始まるわけです。ですので、人類の起源について、自然に畏敬するとい考え方は、人類の考えに繋がってくると思うんです。だから、私のいるお茶の世界で考えますと、日本文化としてお茶が海外に見られるといよりは、これからは本当にお茶の一杯をですね、みんなでお茶を介して、そういう足元の世界といものを説いていきたいといのは、これからの未来に向けて感じているところです。

<河村晴久氏>

世阿弥が言うには、芸能といのは「衆人愛敬^{しゆじんあいぎやう}」、みんなを愛して敬い、そして「寿福増長^{じゆふくぞうちやう}」、幸せを伸ばし、「遐齡延年^{か れいえんねん}」、良い年が長く続くと。まさにこのことと同じですね。芸能の根源といものと、今仰ったお茶の世界といのが本当に同じものを目指しているといことですね。

今、世界が難しい状況になっているんですけれども、常にこの「敬う」というところからスタートする。このことはものすごく重要な感じがするんです。文化ってみんな違いますよね。今仰ったように、いろいろと状況が変わってきて、それぞれ自分の都合のいいことを言い出すわけですけれども。違うのは当たり前なだけけれど、自分に自信があって、足元をしっかりと見て、仲間がいて、自分がしっかりと物事を見ていると、人が違うのは当たり前で、それを敬うことができます。自分だけが正しいのではなくて、まずは敬うとい、そこへ繋がるのではないかと思ひまして、このお話を聞かせていただきました。

私も常に、日本の伝統的なもの、伝統芸能といわれる能をやっていると、自分自身がその能を知っ

ているということがあるから、外へ出て行った時には、私はこんな能を持っていて、そちらのなさるのはまた違うなど。でも、自分にしっかりしたものを持っていると、違って当たり前で、それを尊重して敬って、尊敬して見ることができるんです。だから、お互いに敬えるものになっていけば、世界はどれほど平和になるだろうと。今まさに言ってくださった、清らかであること、それから敬うこと、足元を見ることという、こういう価値感というものは本当に世界のみんなに知って欲しい。そして、それが実現されたら、どれほど世界は平和になるだろうと、この世界情勢の中でつくづくそれを感じながら、今日はお話を伺わせていただきました。お茶を立てて、一緒にいただく、仲間ができる、というその空間は本当に大切ですね。

<速水宗燕氏>

そうですね、本当にもうそれだけと言いますか、何よりも、皆さんが楽しむ。要するにお茶自身も、儀礼というのは普遍的なものでもあります、その儀礼が生まれた環境というのは、変化するものもあっていいと思います。儀礼が生まれた環境というのは起源であったりしますが、環境というのは、やっぱりどんどん変化するもの。こちらはそうした変化の流れをしっかり掴まないと、日本の文化で終わってしまうと思うんです。やはりこれからは、その儀礼というものの大切さを、海外というよりは人類のものとして、しっかりと伝えていきたいなと思います。

<河村晴久氏>

形というものがあって伝わってきた。能でもそうですしお茶もそうです。その形というものが大変大事で、それがなければ伝わらないような技の部分もあるんだけど、結局もっと大事なものはその本質というところで、形は変わり続けるんですよ。だからその本質が見えてくれば、それに応じた形というものができてくる。それに拘らないというお話を伺った、とても面白い今日のお話でございました。本当にこれからの世界、それこそ私の能の世界もお茶の世界もそうですが、なかなか最近は日常生活から遠いところにあるように思われるんですけども、逆に、もっと日常に寄ってきて、生活の中に入ってくれば、どれほど豊かな世界に、豊かな心になるかということを感じながら、今日のお話を承りました。本当にいろいろ詳しいお話を教えていただき、どうもありがとうございました。